

## 平野 寛先生を偲んで

日本顕微鏡学会名誉会員 平野 寛先生（杏林大学名誉教授）は、平成28年8月6日に逝去されました。享年82歳でした。

先生は、昭和34年東京大学医学部卒業後、インターンを経て同大学大学院博士課程へと進まれ、神経筋接合部の形成に関する電子顕微鏡的研究で医学博士の学位を取得されました。昭和40年に関西医科大学解剖学第1講座の小川和朗教授のもとで、助手、講師、助教授を務められ、組織細胞化学、とりわけ電子顕微鏡レベルでの組織細胞化学技法の開発と応用を精力的に進められました。昭和44年から2年半にわたり、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校生物学教室のS.J. Singer教授のもとに留学されました。当時のSinger研究室は、有名なSingerとNicolsonの細胞膜流動モザイクモデルに代表されるような、細胞膜の構造や動態に関するまさに最先端の研究が行われていました。平野先生は電子顕微鏡観察の豊富な経験を生かし、細胞膜の特に糖鎖構造の形成に注目して研究を進められました。当時は糖特異的結合物質であるレクチンの応用が広まりつつあった時期で、平野先生はミエローム細胞のマイクロソーム画分をフェリチン標識レクチンと反応させて電顕観察することで、糖鎖は膜の片側のみにあること、小胞体膜では内腔側に特異的に存在することなどを明らかにされました。これらの結果をもとに、細胞内で糖タンパク質糖鎖が形成される仕組みと、それが小胞という形で細胞膜と融合して細胞表面に糖鎖が露出するという、今日では常識となっている細胞膜生成モデルを、1972年のProc. Natl. Acad. Sci. USA誌に発表されました。まさに細胞生物学上のエポックともいえる画期的な研究成果でした。

帰国後は、創立間もない杏林大学医学部に赴任され、解剖学第2講座の初代教授として教室の立ち上げと運営にあたられるとともに、共同利用研究施設電子顕微鏡部門の責任者として、平成13年に退任されるまでの30年間、活発な研究活動と教育活動を展開されました。とりわけレクチンをプローブとした糖鎖組織細胞化学の分野では、レクチンの生化学的研究の中心であった東大・薬学部のグループなどと連携しつつ、各種標識レクチンを用いた糖鎖の光顕的・電顕的局在パターンを、様々な組織や細胞で明らかにされました。更に、学内外の臨床教室との共同研究などを通じて、癌化、遺伝性病変、炎症などに伴う糖鎖発現の病的変化についても次々に新しい所見を発表されました。これらのレクチンを使った一連の研究に対して、昭和62年に第32回瀬藤賞を受賞してお



られます（受賞タイトル「レクチン法による組織細胞化学的研究」）。

本学会での活動としては、昭和57-58年に常務理事（庶務）を務められ、また平成2年には関東支部長として支部機構の様々な改革に取り組みられました。平成6年には第50回学術講演会の実行委員長、更に平成11年には第48代会長を務められ、医生物系のみならず、材料系の先生方や電子顕微鏡メーカーの方々との深い人脈を生かして、分野の枠を超えた本学会の独自の発展に貢献されました。海外との交流にも力を注がれ、中でも1981年から始まった日中合同電子顕微鏡セミナーでは、医生物系の主要メンバーとして日中の友好と電子顕微鏡学の普及に尽力されました。

他学会では、平成9年1月から平成13年4月まで日本解剖学会理事長として学会運営を主導され、平成11年には日本解剖学会総会・全国学術集会を主催されました。また、日本組織細胞化学会では、第38回総会・学術集会と第14回組織細胞化学講習会を主催されるなど、我が国の形態学・組織細胞化学の発展に寄与されました。更に平成12年には日本学術会議第18期会員に推挙され、我が国の学術全体の動向を見据えた顕微鏡学・形態学の発展に貢献されました。

一方で、「良い研究者は良い教育者でもある」という信念のもと、学生や若手研究者の教育に人一倍情熱を注がれました。杏林大学の学部教育に外部評価制度を導入されるなど、時代を10年以上先取りするような教育改革を実践されました。また平野先生の人柄を慕って、医学部だけでなく理学部、薬学部、農学部、工学部など様々な分野から多くの学内外研究者が研究室に集い、議論に花を咲かせました。そのような方々が現在各方面で活躍しておられる様子を、平野先生ご自身が最も喜んでおられると思います。

平野先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

川上速人（杏林大学医学部解剖学教室教授）